

第1回D³研究交流会の報告

微生物感染症学分野 寺尾 豊

『歯学部ニュース 平成28年度第2号』の“総務委員会だより (22頁)”からのバトンを受けて報告いたします。平成29年1月24日(火)、新潟大学駅南キャンパスときめいとにて、「第1回D³研究交流会」を開催いたしました。『D³』の会名は、参加母体の新潟大学歯学部 (Faculty of Dentistry Niigata University)、デンカ株式会社 (Denka Co., Ltd.)、ならびにデンカ生研 (Denka Seiken Co., Ltd.) の組織名イニシャルに由来しています。さらに、これら3組織が単に和合するだけでなく、相互に刺激し合い高め合うベンチマークな関係が築けるように願いを込めて、相乗効果を表す乗算記号を附して完成させました (図1)。

さて、そもそもの始まりですが、平成28年7月20日に、新潟大学とデンカ株式会社ならびにデンカ生研は、包括的な産学連携推進に関する協定を締結しました。幅広くメディア報道もされましたので、各種媒体でニュースを見聞きした方も多いと推察いたします。同協定の目的としましては、「相互に緊密な連携協力を推進することにより、技術開発や事業化を加速させ、学術研究の振興・人材の育成・相互の発展・社会及び地域への貢献

を図ること」が掲げられています。さらに、特定の研究室単位での小規模かつプロジェクト期間に限定した共同研究等ではなく、より発展した大規模で中長期的な関係を目指しています。これら協定の背景と歯学部で現在取り組んでいる「若手中心のレジリエンスな融合研究」の主旨が合致したことから、他部局に先駆けて上記3組織の研究交流会を行う流れが醸成されてきました。

11月になり、D³研究交流会の企画が始まりましたが、立ち上げ背景から、主役は各組織の若手となることが既定路線となりました。そして、デンカ株式会社ならびにデンカ生研の協定担当者から、「点と点ではなく、面と面で」というアイデアが出てきました。つまり、単一の研究課題やキーワードを基に研究交流会を開催するのではなく、複数のキーワード研究を3組織が持ち寄り、縦横にアイデアネットワークが架橋していくことを目指すことになりました。古来より、「言うは易く行うは難し」とされますが、歯学部若手に交流課題を募りますと、都合15もの研究テーマが集まってまいりました (図2)。若手のそれぞれが綺麗で分かりやすいポンチ絵を作成してくれたこともあり、デンカ株式会社ならびにデンカ生研の若手も呼応するかのよう交流課題を挙げてくれました。



図1



図2

当日プログラムは、「高齢者の誤嚥」、「口腔と全身の感染制御」、「組織の再生と再建」の3つの面となる発表セッション3部で構成しました。1部1部のセッションは、それぞれ複数の組織から発表者を組み込みました(図3)。全員が魅力的なプレゼンテーションを心掛けてくれましたので、参加者も笑顔で惹き込まれるように聴講していたように感じられました(図4)。さらに、発表セッション後には毎回フリーディスカッション枠を設けたことで、確保していた30分の緩衝時間さえオーバーするほどの熱い交流ができました(図5)。最後の情報交換会の頃には3組織の垣根が消え、若手間の冗談や共同研究のアイデアも交わされていました。本稿のタイトルにも第1回と記しましたが、自然と第2回への要望が高まり、次回はデンカ生研の所在地で行うムードになっています。各分野の教授の先生には、1月24日も参加若手の診療や授業調整で大変お世話になりました。これからも継続的にご協力を仰ぐことになりそうですが、引き続きのご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

前号誌面の都合で号を跨いでの掲載となるようですが、その間にデンカ生研から個々のプロジェクトへ連携の申し入れがありました。無事にD³が軌道に乗りそうな旨を追記し、本稿を終えます。



図3



図4



図5